

I. 目的

大学の授業（球技「バレーボール」）において、基本技術であるオーバーハンドパスができない学生が多い事実遭遇した。その原因はいくつか考えられるが、特に、実施者が自らの動きの感じ（動感）や動きの本質を味わえず、技術習得できないまま学習を終えていたことに問題を感じた。そこで、本研究では、これまで球技では用いられてこなかった「自らの感覚で動きを覚えることのできる」、金子の発生論的運動学に着目し、それがバレーボール指導において有効であるか検証することを目的とした。

II. 方法

1. 「発生論的運動学」に関わる諸概念の検討

発生論的運動学に関わる著書及び学術論文を対象に、諸概念を整理した。

2. オーバーハンドパス基本技術構造の検討

バレーボールに関わる文献を対象に、オーバーハンドパスの基本技術構造を把握した。

3. オーバーハンドパスの動感化能力発生指導

バレーボール経験者小学六年女子児童 10名を対象とし、2010年4～10月の間、計6回の指導を行った。指導前のパス能力テストの結果から課題を抽出し、習得が必要とされるパス技術（緩衝動作）と、自らの感覚で動

きを感じ取るための8個の動感化能力を発生させることを目的に、指導プログラムを作成し指導を行った。

III. 結果及び考察

1. 「発生論的運動学」に関わる諸概念の検討

この運動学の重要概念として、実施者の学習状態を知る動きの「形成位相」、指導者が教えるために必要な「動感促発身体知」、指導者と実施者が覚えるために必要な「動感創発身体知」、自らの感覚で動きを覚えるための「動感化能力」の4つのキーワードが抽出された。

そのうえで、発生論的運動学の指導プロセスは、以下のように理解された。まず、動きの構造を明確に説明した上で示範をし、練習に入る。練習中に被験者の学習状態が、どの形成位相にあるのか観察を行い、運動中に探索位相と見られる状態を発見した時点で、動きのヒントを与え、動感を発生させる。次に、偶発位相に瞬間的に出会えたことを確認し、続けて図式化位相となるよう指導者側よりリズムをとるように連続的に声をかけることで、いつでも自在に動けるようになるのである。

さらに、発生論的運動学の分析方法としては、構造分析、形態発生分析、促発処方分析の3つの手法が用いられるべきであるとした。

2. オーバーハンドパス基本技術構造の検討

K. マイネルの提示した局面構造から、非循環運動となるオーバーハンドパスを準備局面・主要局面・終末局面の3つの動きに分節し、構造分析を行った結果、技術習得をするためには、主要局面におけるハンドリングの「緩衝動作」に重点を置く必要があり、それが運動プログラムの中核となるべきと考えられた。また、パス技術を習得する上では、8個の動感化能力（予感化能力、遠近感能力、定位感能力、自在化能力、伸長化能力、伝動化能力、調和化能力、直感化能力）が必要なものとして抽出された。

3. オーバーハンドパスの動感化能力発生指導

動きを覚えるさせるための重要ポイントは、「被験者の運動経験を統覚させることにより、自らの感覚で習練形態を習得できる」ことにあり、プログラムには、金子のいう類似的アナログによる動きを取り入れた。具体的には、①「段ボールと風船を活用した面づくり」、②「バレーボールでの片手直上キャッチパス」、③「バスケットボールを活用しての片手直上キャッチパス」、④「目標物を明確にするための指導者球出し対人パス」であった。

上記の考えに基づいて指導した結果、被験者A・F・Hの3名は8個全て、被験者Bは7個、被験者Jは6個、被験者D・Eは5個、被験者Iは4個、被験者Cは3個、被験者Gは2個の動感化能力が発生し、緩衝動作によるハンドリングも習得することができた。中でも、8個全ての動感が発生できた3名の被

験者は、形成位相による自在位相まで達することができ、他者との関係においても自在にオーバーハンドパスをすることができるようになった。それに対し、3個の動感化能力しか発生できなかった被験者Cは、観察時の形成位相による心と身体の変位が見られた。これは、身体の動きは、指導者側が「運動ができた」と評価できる状態にあるにもかかわらず、本人は心と身体が一体化できておらず、「運動ができない」と思い悩んだまま運動を終えていった特異なケースとしてとらえられた。また、2個の動感化能力しか発生できなかった被験者Gでは、悩みなどを訊き出す交信身体知により、運動ができたかどうかを確認したが、「できない、分からない」と答え、消極的心理状態にあったため形成位相による探索位相のまま運動を終えてしまった。このような、被験者C・Gのように運動発生が体感できないケースも発見でき、今後の課題を見つけ出すこともできた。

指導実践後のパス能力テストにおいて、全被験者のパス回数は指導前よりも上達していたことから、プログラムによる成果、すなわち、動感化能力の発生を促すことがパス技術の向上へつながることが確認された。

IV. 総括

今回の研究成果として、「主体を実施者におき、その内面（悩み）に共感をする事」の重要性と可能性が明らかになった。

主任指導教員 山本忠志

指導教員 森田啓之